【主題】外国語を用いて楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

【副題】外国への興味・関心を高め、主体的・対話的に学べる授業づくり

【学校・団体名】　奈良県北葛城郡上牧町立上牧第三小学校
【役職名・氏名】　校長　秋田　知美

Ⅰ　研究主題設定の理由

本校では2017年度、「豊かな表現力を育むこと」を目標に、研究の一部に外国語活動を含めて取り組んだ。成果として児童に一定程度の表現力が身に付いたと考えられたものの、それを生活の中で生かせるようになるという次の段階の課題も見えてきた。

一方で、2020年度からは新学習指導要領が実施される。５・６年生ではこれまでの学習に「読み・書き」が加わり、３・４年生では新たに外国語活動に取り組むこととなる。本校では、2018・2019年度を移行期間と位置付けた。そうした外国語および外国語活動の指導に対して、2017年度の振り返りから、本校の教員が２つの不安を抱えていることが明らかとなった。

１つは、指導を行う教員が外国語に対して自信がないという実態がある上に、ALT と連携しながら担任主導で授業を進めていくように求められていること、もう１つは、外国語において何を学ばすべきかについて理解が深まっていないこと、がその具体であった。また、2017年度の振り返りにおいて、低学年でもある程度の取組を進めた方がよいと話し合われた。

そういった背景を踏まえ、2018度から３年計画で外国語に関する指導を通して児童にどういった力を付けていく必要があるのか、そのためにはどういった指導や環境整備などが必要であるのかといったことを研究主題として設定することとなった。

本稿は、１年目の取組と、２年目に目指すべき方向性をまとめたものである。

Ⅱ　研究主題と研究課題

１　研究主題

外国語を用いて楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～外国への興味・関心を高め、主体的・対話的に学べる授業づくり～

２　研究課題

①主体的・対話的なコミュニケーション活動を取り入れた指導の在り方を探る。
②外国や外国語への興味・関心が高まるような環境を整える。

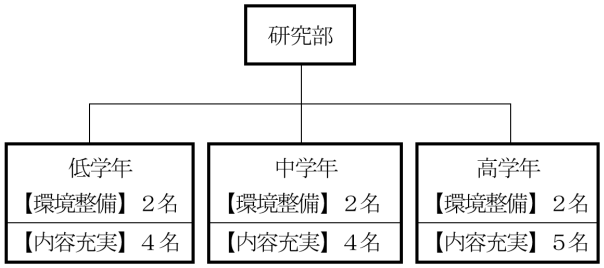
Ⅲ　研究の内容

〇低学年における指導の在り方
〇教材の有効活用・ALT との連携
〇子どもの実態調査
〇子どもに付けたい力の明確化
〇環境整備
〇朝の時間の活用

Ⅳ　具体的な取組

新学習指導要領の本格実施に向け、2018年度は移行期間として、３・４年生で年間15時間、５・６年生で50時間、外国語活動の授業を行うこととした。

まず、図１のように組織をつくり、役割を決めた。役割を決めることで教職員全員が研究に携わり、それぞれやりがいと責任をもって取り組めると考えた。その具体は、校内・外国語教室の環境を整える環境整備チームと、次年度の外国語活動で活用するためのCAN-DO リストを作成するチーム、朝の学習内容を検討・提案するチーム、児童へ外国語活動についてアンケートを行い分析するチームの４つからなる内容充実チームである。それらに各学年ブロックのメンバーがバランスよく分散し、チームを構成するようにした。



環境整備	外国語教室	３名
	校内	３名
内容充実	CAN-DO リスト作成	４名
	朝の学習検討	５名
	アンケート作成	４名

図１　研究の組織

また、公開授業（講師招聘無し【４回：低低中高】）・研究授業（講師招聘有り【２回：中高】）を行い、授業づくりについて研究を深めた。全学年の外国語活動を見られるように各学年１回行い、合計６回行った。夏期休業には、講師を招いて研修を行った。

１　職員研修

講師を招聘しての夏期研修では、クラスルームイングリッシュやアクティビティ、スモールトーク、フォニックスなど授業づくりに役立つことを教えていただいた。具体的な内容で、実際に教職員も体験しながら学ぶことができた（図２）。教職員からは「子どもたちが意欲的に取り組める教材を教えてもらったので２学期から実践したい。」といった感想が述べられた。

図２　夏期研修の様子

２　低学年における授業時数や内容の検討・公開授業

低学年では、外国語活動としての時数を確保していない中で、どのように外国語活動に取り組んでいくのかを検討した。

検討の結果、各教科に外国語を取り入れて実施できないかということになり、年間５時間の外国語活動を取り入れた授業を考え、指導案を作成した。第１学年は道徳２時間、図工、音楽、特活。第２学年は道徳、図工、音楽、特活、生活である。どの授業も各教科の指導目標の中で、外国語活動を組み込んだ内容の授業を提案している。１年生で行われた道徳の公開授業では、国際理解をテーマとして各国の挨拶や食べ物などをクイズ形式にして外国語活動を行った。食べ物は１年生がこれまでの生活で出会ってきた単語がたくさんあり、楽しんで活動している様子が見られた。

３　授業研究

１回目の授業研究は、奈良教育大学からＡ先生をお招きし、６年生の外国語活動を振り返りながら研究を進めた（図３）。

図３　授業研究の様子（６年生）

授業後の振り返りでは、高学年ブロックからALTとの連携についての提案があり、グループに分かれて意見を交流した。また、講師先生からもALTとの連携についての話があった。ALTに役割を任せ、担任一人でしないといけないと思わずに進めることが大切であることを教えていただいた。また児童に、英語を聞いて「どういうことかな？」と考えさせることで外国語活動が深まることも知ることができた。

２回目の授業研究は、奈良教育大学のB先生をお招きし、４年生の外国語活動を振り返りながら研究を進めた（図４）。

図４　授業研究の様子（４年生）

振り返りでは、中学年ブロックから提案があったコミュニケーションを高めるための活動として適切であったかについて話し合った。分からないことを友だちに尋ねたり、何度も同じフレーズを繰り返したりしながらやりとりをしていて、どの子も活動できていたことから、高めることができたのではないかという意見が多数出た。講師先生からは、コミュニケーションについて教えていただいた。正確さにこだわり過ぎて発話しにくくなる事態は避けること、児童が英語を聞いてある程度の意味が分かっているか確認しながら進めることが大切であることを教えていただいた。

中・高学年の公開授業では、主に以下の指導の工夫があった。①ルーブリックを児童と共有する。それにより、自分なりの目標をもって取り組め、それに対する振り返りがしやすかった（図５）。②ゲームを通して楽しみながら繰り返し英語のフレーズを使ったり聞いたりする。③ICTを活用して視覚的・聴覚的にアプローチをする。④児童の生活と近い内容を題材とする。放課後に振り返りを行い、良かったところや改善できそうなところを教職員で出し合い、学びを深めた。

４　アンケートの作成・実施と分析

外国語活動について、児童の実態を知るために３年

クラスで一番人気の教科を探ろう！！

今日のもくひょう

英語を使って
「好きな教科をたずねたり伝えたりする」ことが・・・

◎	自分でスムーズにできる。
○	お手本を見たり考えたりしながらであれば自分でできる。
△	先生や友達に手伝ってもらえばできる。

図５　５年生の授業で示したルーブリック

生から６年生の児童にアンケート調査を行った（10月）。紙面の関係上特徴的であった一部を抜粋する。

質問①では「外国や外国語活動でどんなことに興味・関心があるか」を複数回答可で尋ねたところ、学年による差はなく、どの学年も「英語を使えるようになりたい」「外国に行ってみたい」という回答が多かった。児童は、外国語を学んでもっと色々なことを知りたいと思っていることが分かった。質問③では、「外国語活動で楽しいと感じるときはどんなときか」を複数回答可で尋ねた。結果はどの学年も「ゲームをしているとき」が多く、「理解できたとき」「英語でやりとりができたとき」が次いで多かった。質問⑤では「外国語を学んでよかったことや役に立った」ことを記述式で尋ねた。多くの児童が「覚えた英語が使えたこと」を挙げていた。テレビを見ていて出てきた英語が読めたり、外国人と出会った時に覚えた英語を聞き取れたり、実際に使えたときに、「よかった」「役に立った」と思えるようである。これらの結果から、児童は概ね外国語活動を楽しみ、積極的に取り組んでいることが分かった。一方で、「英語がどちらかといえば嫌い・嫌い」と答えた児童は14%、「英語をあまり使おうとしていない・していない」という児童は 48%であった。これも学年による差はなく、どの学年においても同様の傾向が見られた。教職員として、否定的な回答をした児童はどうして嫌いなのか、使おうとしていないのかを把握する必要があると考え、もう一度アンケートを行うことにした。また、これらの結果を教職員で共有し、以降の授業の改善に生かすための資料とした。

２回目のアンケート（１月）では、「外国語活動の授業が好き・嫌い」の理由、「英語を使おうとしている・していない」の理由を尋ねた。全学年で、87％の児童が「好き」と回答した。外国語活動の授業が好きな児童は英語で友だちや教員・ALT と話したり、いろいろな言葉を覚えたりすることを好きな理由として挙げている。好きではない児童は「覚えられない」「言えない」ことを理由に挙げていて、外国語への自信のなさが「嫌い」につながっていることが分かった。また、「進んで英語を使おうとしているか」については、「していない」と答える児童の割合が増え、外国語活動は好きだけど英語を使おうとしていない児童がいることが分かった。その理由としては、「英語がわからない」「覚えられない」という自信のなさに加えて、「使う時がない」ということが理由になっていると考えられた。

これらのアンケート結果から、これまでに取り組まれてきた外国語活動の内容や方向性は、外国語を楽しむという目的を一定程度達成していたと考えられる。一方で、現状として、①児童は外国語を学び、話せるようになりたいと思っているにも関わらず、使う場面が少ないということ、②単語やフレーズを覚えていないことや正しい発音がわからないことに起因する自信のなさ、が見えてきた。今後の課題として整理し、取組を進めていきたい。

５　CAN-DO リストからガッツリストへ

児童につけたい力を明確にするために、当初 CAN-DO リストの作成を試みた。そのために CAN-DO リストについて調べていくと、重要ではあるものの、本校が求めている、直接授業で使えるものではないのではないかという議論がなされた。そこで、付けたい力を明確にしつつ系統立てた目標が分かりやすいという CAN-DO リストの特徴をもち、授業に直接使えるシートの開発を試みた。議論を重ねて開発したものが図６である。１年間で学習するユニット（単元）の目標を１枚のシートに具体的に示すようにした。ユニットの始めに目標を確認し、ユニットの終わりに振り返って色を塗る、というように使うことで、児童と教職員が具体的な学習目標を共有し、主体的に取り組めるようにすることを目指したシートを開発することができた。イラストを児童にとってなじみのある学校のキャラクターにすることで、視覚的にも外国語活動に親しみやすくした。このシートの名前を教職員から募集したところ、「ガッツリスト」という名称が採用されることとなった。

図６　ガッツリスト

６　環境整備

2017 年度までは外国語活動を学級の教室で行っていたが、視聴覚室を外国語教室とし、そこで行うこととした。特別教室にすることによって、学習環境が整えられ外国語の学習に取り組みやすくなった。また、授業以外の場面でも、児童が外国語に触れる機会をつ

くるために校内の環境整備を行った。

環境整備をするにあたり、外国語教室と校内の２チームに分かれて活動した。

外国語教室チームは、夏休みに外国語教室前方に How are you?に対する答え方を掲示した。また、後方には世界のあいさつを掲示した。また、６年生の授業研究と連携し、Reaction Words（相手の話に対して何か返答する言葉）を掲示した。授業中に子ども同士が掲示物を見ながらコミュニケーションを図っている姿が見られ、掲示物の効果を感じることができた。

校内チームでは、夏休みに学年の系統性を考慮しながら全ての階段に英単語を掲示した（図７）。10 月には校長室・音楽室・保健室・図工室・理科室・家庭科室・トイレに、英語表記したものを掲示した。

図７　階段の掲示物

外国語教室の掲示は実際に、外国語に不慣れな児童にとってのヒントになったり、外国語を学習する教室内の雰囲気ができてきたりするという効果を発揮している。校内の掲示は、児童にとって英単語が身近なものとなる効果を発揮している。

しかし、教職員から課題として、児童によっては掲示物の読み方が分からず、ただの絵とスペルが書いてある貼り物になってしまっている現状が挙げられた。ただの貼り物として終わらせることなく、教職員がその掲示物を使って指導する場面が必要だという議論がなされた。今後、朝の学習において、よく使用する階段の単語を取り扱うなど、階段の掲示物のより有効な活用方法を検討していく必要がある。

さらに今後の発展として、児童がそれまでに学習したことを思い出せるように、よく使う I like ～. や I can ～. などの英文とそのことを連想できるイラストを掲示していくことも考えられる。また、「World Trip 世界の文化紹介」と題して、世界のお正月やクリスマスなどを児童昇降口の掲示板やガラスケースなどを活用し紹介するといった、外国語の文化に触れさせるような環境を整えていくことなども考えられる。

７　朝の学習

本校では火・木・金曜日の８時 25 分から 40 分までを朝の学習の時間として設定している。2018 年度はそのうちの金曜日を外国語に関する活動の時間とした。朝の学習検討チームが１学期に内容を検討し、各学年に応じた教材を作成し各学級に配布した。そして２学期から全校で統一して取組を進めることができた。外国語の学習にあたり、単語はコミュニケーションを図る上で重要な知識であり、年間の限られた授業時間以外に学習する貴重な場となった。

Ⅴ　まとめと次年度の方向性

2018 年度は３年計画の１年目として、「外国語を用いて楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする児童の育成　～外国への興味・関心を高め、主体的・対話的に学べる授業づくり～」という研究主題の下で進めてきた。それを実現するために、研究課題として「①主体的・対話的なコミュニケーション活動を取り入れた指導の在り方を探る」「②外国や外国語への興味・関心が高まるような環境を整える」という２つを設定した。それらに対し各取組を進めてきたが、それぞれの考察内容から考えて、一定程度達成できたと言えるだろう。

課題として、１年間の取組について総括する中で、次期学習指導要領で示されている「深い学び」について、教職員の理解が深まっていないことが挙げられた。これから「深い学び」とはどのような学びで、達成した児童の姿はどのようなものであるか、研修を深めなければならない。また、2018 年度の各チームで取り組んできたことは相互に関連が深いことが分かった。それぞれに取り組んできたことを統合して児童の深い学びを達成することを目指していかなければならない。

そこで、２年目となる 2019 年度は研究課題①の「指導の在り方を探る」を「深い学びへつながる指導の在り方を探る」に変えて実践し、状況や目的に応じて学んだ外国語を活用し、自信をもって積極的に話せる児童の育成を目指したい。研究課題②については、「環境を整える」ことから「環境を整え、活用する」に変え、これまでの取組を継続しつつ、さらに朝の学習や授業とつなげた実践を目指したい。これらのことから研究主題の副題を「～外国への興味・関心を高め、主体的・対話的で深い学びにつながる授業づくり～」と変えて進めていくこととなった。現在２年目の取組が進行中である。研究主題の達成に向けて今後も教職員一丸となって取組を進めていきたい。

執筆責任者　教諭　橋本　泰介